

連載・エッセイ (300)

風に吹かれて ～全国無料出張講演の旅～

野田 公俊*

I 秋：台風一過の中国山地

秋晴れのとても爽やかな朝である。前日、広島から移動してこの町に入る。ホテルの建物は古い。歴史を感じさせる部屋の設えが好きである。ベッドにも柔らかい日差しが届いている。朝食には少し早い。散歩に出てみる。商店街が続いている。まだ開いている店はない。早朝練習に向かうのだろう、中学生の団が自転車で近づいて来る。道を少しあける。「野球部だろうか、いや陸上部かもしれない」。私のこの視線を感じたのだろう、先頭の子が「おはようございます」と大きな声をかけてすれ違う。それに続く元気な挨拶の自転車集団。とても温かいものに包まれたようなよい気分になる。

「栗谷中学校への道は通行止めですよ」と運転手の声。前の週に襲った台風が至る所で崖崩れを引き起こしているようである。豊かな中国山地の一角は大混乱し、アクセスも難しいらしい。学校の先生に電話をし、大きく迂回をすれば行くことが可能とわかる。車一台がやっと通れる山道なので、くれぐれも注意して下さいとのこと。早目にホテルを出発する。山岳道路の片側は急斜面で崖下には激しい流れの渓流が見える。信じられないような運転技術を駆使して何度も対向車線の車をやり過ごす。予定の2倍以上の時間をかけて目的地の広島県大竹市立栗谷中学校に到着する。生徒たちが窓から手を振って迎えてくれる。

パワーポイントを使って早速講演を行う。みんな目が輝いている。一言も聞き漏らすまいと熱心に耳を傾けている様子がわかる。先生たちもメモを取るのに忙しい。保護者も何人か参加している。途中で生徒たちに何度か質問を投げかける。皆が我先に手をあげる。そして思いもよらない素晴らしい答えの数々。前の週に行った全校生徒数百名の都会の中学校での講演とは明らかに違う。生徒たちの「覇気の違い」などという簡単な言葉では説明できないくらいの圧倒的なパワー。感動して講演を終える。あとで知ったが放課後も生徒と先生の愛情いっぱいの交流は続くのだと言う。素晴らしい学校の存在を知り心から嬉しく思う。

細菌の世界を知ってもらおうとはじめた「ミクロの世界からのメッセージ」と題する全国無料出張講演は今年で14年目である(写真1～3)。北は北海道の小学校から、南は沖縄県宮古島の高校まで約300校で実施し、受講者は8万名を超える。この中で印象に残る学校の筆頭がこの栗谷中学校である。どのような教育をしているのだろうかに興味をもつ。講演後、授業の様子を見させてもらう。きわめて普通の授業風景である。生徒と先生がまるで親子のように接し、近所の塾のように同じ目標に向かって一緒に歩んでいる。全校生徒19名のこの栗谷中学校は今はない。平成23年(2011年)度に閉校になったからである。また、この地を是非訪れてみたい。

*千葉大学大学院医学研究院病原細菌制御学 教授 Masatoshi Noda



写真1 講演の様子①

パワーポイントを使用して、「ミクロの世界からのメッセージ」と題して講演をする。細菌のことに興味をもってくれたようである。

(筆者提供)



写真2 講演の様子②

熱心に耳を傾ける生徒たちに講演にも熱が入る。多くの質問が出て時間があっという間に過ぎる。

(筆者提供)

II 冬：東シナ海は大荒れ

ある年の新年あけて間もなく、沖縄県を無料出張講演で訪れる。千葉の自宅を日の出前の午前5

時に出て車で羽田空港に向かう。那覇空港にはお昼前に順調に着く。空港で昼食を済ませ、沖縄県立浦添高校に向かう。2年生400名を対象に「ミクロの世界からのメッセージ」と題する無料出張



写真3 講演後の実験指導の様子

講演後に細菌観察の実習を行う。生徒たちは熱心に取り組んでいる。細菌の形状に興味をもったようである。後日、素晴らしいレポートが届く。

(筆者提供)

講演を行う。ただちに沖縄県立球陽高校に移動し、1～2年生615名にも同様の講演をする。講演は6時前に無事に終わり中心街のホテルに戻りチェックインをする。沖縄での最初の日はきわめて順調である。翌日は那覇市の泊埠頭からマリナーという高速艇に乗って東シナ海の慶良間諸島に移動予定である。

冬の沖縄は寒いが千葉に比べれば何でもない。早起きをして那覇市の泊埠頭に向かう。その日、東シナ海は大荒れとのこと。無料出張講演を予定している渡嘉敷島へのマリナーも欠航している。旅客貨物車両を搭載できる大型の村営フェリーは運行している。迷わずフェリーに乗船する。乗客はきわめて少ない。無料出張講演に行く客だと知った船長が気を使って操舵室を案内してくれる。近くを航行中の船舶ならレーダーで全船把握できるという。冬の東シナ海は荒れることが多いが、その日は特別風が強く波も高い。船酔いを心配して下さったが迫っている講演のためかまったく平気である。

2時間ほどで渡嘉敷港に無事に着く。ただちに港近くの渡嘉敷中学校を訪ね、予定通りに無料出

張講演を開始する。島に2つある小学校からの可愛い参加者たちも集まっていて総勢70名になっている。さまざまなウェルカムセレモニーに感動する。全島をあげての歓迎ぶりが伝わってくる。その日は海が荒れてマリナーも欠航しているの、きっと講演には来てくれないだろうと皆が残念がっていたと言う。そんな時、講師の先生がフェリーで渡嘉敷島に向かっているという情報が何処からか入り、生徒たちに歓声が上がったと、あとで知る。船長の粋な采配ではないかと想像している。温かい心に感謝である。

渡嘉敷港を夕方に出港するフェリーで那覇に向かう。島の関係者も多数乗船している。波も少し穏やかになって来ているようで比較的快適に那覇の港に着く。渡嘉敷島出身の教育関係者の出迎えを受ける。関係者だけの夕食会に出席してほしいとのこと。宿泊しているホテルの近くに一緒に移動する。驚いたことに50名くらいの品のよい穏やかそうな紳士が勢揃いして待っている。全員、渡嘉敷島出身者とのこと。那覇市で開業している偉い先生もおられる。無料出張講演を故郷の島で行って下さったことに感謝しているとのこと。

このサプライズの歓迎会は2時間ほど和やかに続く。皆さんの優しさに触れ充実感いっぱいホテルに戻る。

Ⅲ 春：桜を待つ北の大地

飛行機は高度を下げ着陸態勢に入る。海の向こうには雪に抱かれた日高山脈の山々が見える。堂々とした山容は真冬の険しさをすでに消しており、とても穏やかで美しい。海辺の町は静内か浦河辺りであろうか。襟裳岬はすでに通り過ぎたようである。5月初旬の日高地方は桜の開花を待ちわび、エネルギーに満ちあふれている。旧友のH.I先生が新千歳空港で出迎えてくれる。無料出張講演を行う新ひだか町の小学校までの送迎を引き受けてくれる。この町は旧・静内町と旧・三石町の合併で誕生した新しい町である。安全運転で有名なH.I先生によれば、目的地の小学校までは道路もよいので3時間弱のドライブで着くと言う。

静内と言えば吉永小百合さんが主演した「北の零年(きたのぜろねん)」が思い浮かぶ。映画の背景には明治3年(1870年)に起きた庚午事変がある。徳島藩洲本城代家老の稲田家と主家の徳島蜂須賀家のさまざまな確執で起きた不幸な事件である。維新後、蜂須賀家の家臣たちは士族となったが、稲田家の家臣は陪臣(家臣の家臣)ということで士族になれない。そこで稲田家の家臣たちは蜂須賀家からの独立を画策する。そこから両者のあいだに不信感がつり、さまざまな事件へと進んで行く。明治政府は事態の解決のため稲田家の家臣団に北海道の静内への移住を命じ、開拓した静内は稲田家の領地とすることを約束する。

映画では静内に家臣団が入植するところからはじまる。厳しい冬を乗り越え、やっと稲田家の当主を静内の地にお迎えする。しかし、到着した殿様は明治政府の廃藩置県により移住命令が反故になったことを告げ静内を去って行く。その後の家臣団のさらなる試練を映画は描いている。この時代、多くの藩は似たような困難に遭遇している。会津藩も青森の地への移住を命じられている。移住する会津藩松平家の家臣団の中に当時7歳の曾

祖母もいる。2歳下の弟と新潟港から明治政府が手配したアメリカの蒸気船ヤンシー号に乗り下北半島の地に向かう。曾祖母とその弟に付き添ったのはただひとりの肉親の彼らの祖父である。両親は歴史的な戦いで帰らぬ人となってもういない。

「小学校に着きましたよ」と言うH.I先生の言葉で我に返る。新ひだか町立三石小学校は太平洋を見下ろす高台に建っている。6年生29名に無料出張講演をはじめ。生徒たちは熱心にノートを取っている。この子たちのご先祖の多くは徳島から来たのかもしれない。大変な困難を乗り越えて来たのだろう。教育委員会の先生たちも参加している。地元の新聞社の記者も熱心にメモを取っている。1時間の講演は順調に進み、最後に生徒の代表から御礼の言葉をいただく。空港までのH.I先生の車の中で充実感に浸る。

Ⅳ 夏：3つの希望のトレイル

八戸の中心街を通過して岬の灯台を右手に大きくカーブする。車の窓から眼下に雄大な青い海が見えてくる。この海はるかアメリカ大陸の西海岸までつながっている。海岸の砂浜と並行して走る広大な天然芝生が見える。太古から続く珍しい芝生のある風景である。まだ夏のキャンプ場の賑わいも残っている。車の進むこの道は東山魁夷の「道」のモデルになった県道1号線、希望へと続く人気の道である。これに最近誕生した1本の新しい「道」が加わる。「みちのく潮風トレイル」である。三陸復興国立公園内を走る。青森県八戸市から福島県相馬市まで続く全長700kmの道である。海と里と川と森のあいだを巡る希望へのロングトレイルである。

このトレイルが小さな岬を越えると種差海岸から大久喜海岸へと入る。小さな漁港のそばに神社があり真新しい鳥居が立っている。多くのウミネコが営巣してにぎやかである。どこにでもありそうな普通の日本の風景である。この神社の前に先日100名を超える外国の人たちが集まったそうである。アメリカ合衆国オレゴン州から駆けつけた人たちである。この巖島神社の鳥居にはちょっと不思議な話がある。太平洋を旅したのである。

連載・エッセイ

しかも1万4千kmもの旅を。2011年3月11日、突然大きな津波がこの港を襲う。何もかもが流される。港のそばの神社の2つの鳥居も例外ではなく、あっという間に流失してしまう。

流失から2年後、鳥居の2本の足をつなぐ一番上の屋根のような部分「笠木」が思わぬ場所で見つかる。オレゴン州のニューポート市とフローレンス市の海岸に2つの笠木が漂着したのである。大久喜海岸から7千km離れた太平洋の対岸の町の人々は大切なものに違いないと思い保管を決める。それがポートランド日本庭園の学芸員の目に留まる。鳥居には寄進者の名前と家内安全の文字が読み取れたと言う。やがて八戸市の神社のものと判明する。横幅約5m、重さ約200kgのこの笠木の返還プロジェクトがスタートする。奇跡が奇跡を呼び、太平洋を挟んだ2つの国の「海のトレ

イル」の心の交流が加速する。

ついに日本への返還が実現し、大久喜海岸に戻った笠木の修復がはじまる。2016年5月、東北新幹線の八戸駅に降り立つ多くのオレゴン州の人たち。出迎える八戸の人たち。神社の前で復元した鳥居を祝う式典が行われる。鳥居に名前があった寄進者の老人も参加している。感激の涙がアメリカの参列者の涙を誘う。厚意と感謝の歓迎すべき連鎖である。「みちのく潮風トレイル」はさらに南下して岩手県の洋野町に入る。洋野町立の3つの小中学校で無料出張講演を行う。生徒代表の御礼の言葉と大きな花束をいただく。帰りの東北新幹線は混んでいる。隣の席の外国人が私の花束をチラチラと見ている。幸せな香りいっぱいの旅である。

本稿は、本会の助成により、野田公俊先生が長年に亘り実施され、文部科学大臣表彰「平成20年度科学技術分野の科学技術賞（理解増進部門）」受賞の対象となった「全国無料出張講演」についての報文を「化学療法領域」2017年2月号より許可を得て転載したものであります。